

週刊センターニュース No.297



第297号(2010年2月15日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 第7回大学教育セミナー開催のご案内 ○●○

近年、大学教育において、授業を教員から学生への単なる「知識の伝達」の場ではなく、教員-学生の双方向性、または学生間のコミュニケーションを通じて学ぶ、「知識の構成・再構成」の場として捉える考え方が強くなってきています。その状況下において、グループワークを中心とした問題解決学習、探求学習やプロジェクト学習など、アクティブラーニングと総称される、学習者の能動性を引き出す授業形態も導入されています。しかし、アクティブラーニングにおいて、教員は知識の伝達者だけではなく、学生の積極的な学習を支援する、いわばファシリテーターという役割を担うことになり、具体的なアクティブラーニング実施法について不明な点も多くあります。またアクティブラーニングは教員が主導する授業形態ではないことが多く、その授業形態を演出し支援する学習空間についても検討が必要となります。

そこで、本セミナーではまず日本で数多くの様々な教育実践、教育研究を取り組んでおられる白鷗大学教授 赤堀侃司先生より、アクティブラーニング実施の上で最も重要なことである学習者の能動性を引き出すために教員が考えるべきことについてご講演頂きます。また、アクティブラーニングの実践・研究をされている先生方をお招きし、アクティブラーニングの理論や実践、今後の展開についてご講演頂き参加者の皆様と大学教育のこれからについて活発な議論をしていきたいと考えています。

主催: 大学教育開発・支援センター 共催: 大学コンソーシアム石川 後援: 日本教育工学会

テーマ: 「アクティブラーニングが創る大学教育の未来」

日時: 2010年2月22日(月) 12:30 受付開始 13:00 開始

会場: 金沢大学サテライトプラザ(金沢市西町三番丁16番地 金沢市西町教育研修館)

プログラム

13:10-13:30 趣旨説明 山田政寛(金沢大学 大学教育開発・支援センター 准教授)

13:30-14:30 基調講演 主体的な授業を求めて-私の実践から-

赤堀侃司(白鷗大学 教育学部 教授/東京工業大学名誉教授)

14:45-15:30 講演 知識・技能・態度の全体的育成を目指すアクティブ・ラーニング

-授業デザイン評価の関連に焦点づけて-

溝上慎一(京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授)

15:30-16:15 講演 学習空間とアクティブラーニング-東京大学 KALS の実践をもとに-

西森年寿(東京大学 教養学部附属教養教育開発機構 特任准教授)

16:30-17:20 パネルディスカッション 司会 山田政寛 パネラー: 赤堀侃司、溝上慎一、西森年寿

○●○ カリキュラムとFD ○●○

2月19日(金)に行われる地域創造学類のFD研修会のテーマは、「教育課程編成プラットフォームの構築に向けて」となっており、本研修会は地域創造学類の教育理念と目標を実現するグラジュエーションスキルとカリキュラムマップの策定作業の過程に位置づけられていることが趣旨文で紹介されている。今後、学域・学類制における教育の定着に向けて、各学類・研究科において同様の作業、すなわち各学類・研究科ごとの卒業(修了)時のラーニングアウトカムとそれに基づく教育課程編成方針(カリキュラム・ポリシー)の明確化、さらにカリキュラム・ポリシーの明確化に

伴う現行カリキュラムの点検、整備、教育プログラムの検討、各授業科目とカリキュラム・ポリシーとの整合性についての点検が進められていくものと予想される。このような状況において、地域創造学類の上記の取組みがFDとして認識されていることに注目したい。以下に、「カリキュラム編成もFDの一環である」とする寺崎昌男氏（前大学教育学会長）の論説[1]の概要を紹介する。

大学および大学院の設置基準では「大学は（大学院は）、授業（及び研究指導）の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする」とあるが、「授業の内容の改善を図るための組織的な研修及び研究」と「カリキュラム改訂」や「カリキュラム編成」とは表裏一体であることが海外の事例も参照しながら述べられている。各授業科目のレベルでの担当教員自身による授業改善のために、公開授業や研修会等で情報を共有することが重要であることに変わりはないが、カリキュラム・ポリシーという教育組織の方針を共有した上で各授業科目を設計し、同時に各授業科目の内容を相互に理解し、授業科目間の関係性を念頭に置きながら組織としてカリキュラムを組み立てていく共同作業の過程自体もまた確かにFDである。寺崎氏によれば、ガフらはアメリカのFD活動が1980年代に新しい段階を迎え、その特質は、総合的人文学カリキュラムの開発、マイノリティー文化の導入、環境問題・ジェンダー論等を初めとする新しい時代的要請を、いかにカリキュラム化するかという教員集団の作業こそがFDとメダルの表裏をなしていたと述べている。また寺崎氏は、ノイマンによって紹介されたドイツの教員能力評価リストでは、その最初に出てくるのが「カリキュラム計画能力」であることを指摘している。寺崎氏ご自身もまた、勤務大学での全学共通カリキュラム編成において全学から集められた教職員と連日のように協議を重ねた体験から、カリキュラム編成それ自体が実質的にはFDに他ならないことを肌身で感じたと述べておられる。

学域・学類制の下での教育の開発は、各学類における卒業時の具体的なラーニングアウトカムの設定とカリキュラム・ポリシーに基づくカリキュラム改訂、カリキュラム編成を中心にFD活動として今後行われていくことになるのであろう。すべての学類カリキュラムの基盤となる共通教育においては、平成18年度のカリキュラム刷新により全学共通科目に基づくコア・カリキュラムへと踏み出したが、その移行をさらに進めるために、現在、共通教育機構と全学カリキュラム検討委員会との連携により、環境・ESD (Education for Sustainable Development)、英語国際コミュニケーション、健康など現代的教養として重要性を増す特定のテーマの下に共通教育科目をパッケージ化し単位修得要件を設定する認定プログラム（共通教育特設プログラム（仮称））について検討が始まっている。特に環境・ESDについては人間社会、理工、医薬にまたがる科目パッケージの可能性について検討する必要がある、プログラム内の科目の系統樹の設計には異なる分野の教員の協働作業としてのFD活動が必要不可欠である。

ところで、カリキュラム・ポリシーの設定と運用の事例として龍谷大学理工学部物質工学科を週刊センターニュース No. 270 で紹介したが、この事例では、物質工学科内の申し合わせにより、各授業科目のシラバスにおける学習目標の記述を複数のカリキュラム・ポリシーのいずれかに限定している。このことにより、各授業科目レベルで教育内容とカリキュラム・ポリシーとの整合性が常に担当教員自身により点検されることになる。参考例として改めて紹介したい。

（文責 大学教育研究開発部門 西山宣昭）

[1] 「FD試論 その理解と課題をめぐって」寺崎昌男、IDE現代の高等教育 No. 503 (2008) 4.

○●○ アカンサスポータルにFD・SDカレンダー掲載中 ○●○

アカンサスポータル上にFDカレンダー・SDカレンダーを掲載しています。全国の大学や大学コンソーシアムによるフォーラム、セミナー等の(2010年2月・3月開催分)情報があります。是非、ご活用下さい。